

コロナ禍の授業で思うこと

出席：元大K(元大学教授)	大学K(大学准教授)
元高S(元高校教諭)	現高S(現役高校教諭)
現高F(現役高校教諭)	元中D(元中学校教諭)
現中H(現役中学教諭)	編集K(フリーランス編集者)

Content

- 1 コロナ禍で英語の授業はどう変わったか？
- 2 新学習指導要領と「指導なき評価」
- 3 「思考・判断・表現」の評価をめぐって
- 4 木を見て森を見ない評価

- 1 コロナ禍で英語の授業はどう変わったか？

司会（編集K） 本日は「コロナ禍の授業で思うこと」というテーマで話し合いを進めていきたいと思えます。2020年の3月にコロナ禍による一斉休校があり、その後2023年の1月現在まで3年半にわたってコロナ禍が続いているわけですが、それによって英語の授業はどう変わったか。各学校段階で、コロナ禍になってどのようなことに困ったか、今はどのような状態で授業を行っているかといったことを、まず話題にしたいと思えます。ちなみにこの座談会には小学校の先生がおりませんので、私の方で何人かの小学校の先生にうかがったことを報告させていただきます。コロナ禍になってまず困ったことは、話せない、歌えない、発表活動が子供個人対教師でしかできない、リスニングだけの授業になった、といったことでした。中学校や高校でもいろいろ困ったことがあっただろうと思えますがいかがでしょうか。

現中H 私の勤務する中学校では、コロナ禍になってリモートの授業になったわけですが、個々の生徒と教師がやり取りをすると授業がその生徒個人と教師だけの世界ようになってしまうので、カメラを黒板に向けて授業の様子を映して、テレビのように放映するという形になりました。黒板の文字が映るので、生徒は授業の終わりにそれを写真に撮っていたようです。また、別の中学校では教師がビデオクリップを作り、生徒がオンデマンドでそれを

視聴するというところもありました。ビデオクリップを500本作ったということで、大変な作業だったと思います。

現高S 私が勤務する高校では、2020年度からClassiやロイロノートなどを導入し、ICTを活用した授業を進める予定でした。Zoomの活用も視野に入れていましたが、年度当初は、生徒が登校できず、紙の資料を自宅に郵送し、学習を進められるようにしました。そのうちにZoomで、時間割通りの授業をリモートで行うようになりました。教師が不慣れで、まずZoomの操作に慣れるのが大変でした。また、ロイロノートの活用もできるようになり、授業担当者が授業毎に、それぞれ課題を出し、生徒は毎日膨大な課題を受け取り、課題に追われる日々を過ごしていました。教師のほうも授業を受けたことを確認するために課題を出しているような感じでもありました。果たしてこれで学力がつくのかという不安がありました。Zoomでは、ブレイクアウトルームの機能を使い、グループ活動もしましたが、グループ内で英語でやり取りをするというよりも、生徒が誰かとつながれる場を提供するという意図がありました。Zoomでの授業ではパワーポイントを使ってQ&A形式で行いましたが、回線が不安定で、画像が途絶えたり、音声不明瞭だったり、双方向の授業は難しいと思いました。また、教師も技術に追いついていないという感じを強く持ちました。

現高F 2020年の1学期は1方向の授業しかできませんでした。グーグルクラスルームを使っていたのですが、私は高校のライティングの授業を受け持っていたので、パワーポイントで教材を作りジャーナルを書くなどの課題を設けてそれを配信するという1方向の授業でした。毎週テストも行っていたので、教材作りに追われて1日中働いていました。普段の3倍くらい働いていたという印象があります。教材を作る、配信する、生徒から送られてきた課題を確認する、テストをするという作業をしながら生徒に会えない。まるで闇の中にいるようなつらい思いがありました。2学期になって、授業の半分は対面、半分はオンラインになり、2021年度からは全て対面の授業になりました。2020年はオンラインの授業について1から学んだという印象です。おそらく世界中の教師が学ぶことが多かった年でしょう。でも、学習効果は極めて少なかったと思います。

司会（編集K） オンラインの授業は学習効果がなかったですか。

現高F 1学期の授業は学習効果がなかったと思います。2学期になるとそれが変わってきた。やはり双方向の授業でなければならないと思います。楽しくオンラインの授業ができる工夫や双方向のやり取りができる工夫などもある学びましたが、準備が大変です。やはり対面の授業がよいし楽です。

生徒と教師が1対1の関係でなく、全体で学び合い何かに向かっていくという対面の授業が、やはり英語の授業にはふさわしいと思います。

司会（編集K） 現高S先生と現高F先生のお話で共通することとして、リモートの授業で本当に学力がついているのかわからないということと、教材を準備するのが本当に大変だということが浮かび上がってきたと思いますが、大学ではいかがだったでしょうか。

大学K 大学は比較的ICTの機材がそろっていましたが、学生が機材を持ってなかった時期がしばらくありました。コロナ禍で世界的にICT需要が高まって手に入りにくくなってきたのと、大学の場合は小中と違って支給されるのでなく、学生が自費で購入しなければならないということもあって混乱した状態が続きました。そんな状況の中で、大きく分けて2つのスタイルで授業が行われました。1つはオンデマンド型というか課題型といったもので、全員の学生に連絡できるシステムがあるので、それを使って今週はこれをやって来なさいと課題を連絡する、その際にパワーポイントなどで教材を作ってアップロードし、学生はそれをダウンロードして取り組むといった課題配信型ですね。その中で配信する教材として動画を作製する教員もいました。ちなみに私もそうでした。先ほども話題になったテレビ番組を配信するというものに近い形ですね。もう1つはZoomを使って、双方向の形で通常の授業のように行うという形で、それを望む教員がかなりいました。そのために教員も学生もZoomの使い方を学んで、2020年の4月にはZoomで授業ができるようになっていました。Zoomの授業でよいのは事前の準備が配信型ほどかからないこと。通常の授業と同じようにすればいいわけですから。でも、それでどんなことが起こったかという健康被害。学生はずっとパソコンの画面を見ている、90分1コマの授業を5つ6つも見続けるのですから、当然健康被害が避けられません。そうした事態が予想されたので私はオンデマンド型で通しました。Zoomはほとんどやりませんでした。ただ配信型でも課題が多いと学生も教員も疲弊してしまうので、オアシスのような場を作りたいと考えて、講義中心の内容で学生がリラックスして楽しめるようにしました。この授業は学生が内容をよく覚えていてくれて、「大学らしい授業だった」と言ってくれるのですが、現高F先生がおっしゃったように、それで学生に英語の力がついたかという疑問があります。講義形式の授業は動画を作るのですが、20分から30分の内容です。普段90分の授業で話す内容が動画にすると30分程度に収まってしまいます。だから普段の授業ではこちらが話す時間のほかに学生とのやり取りの時間がかかなりあるのだということが逆にわかりました。動画を制作するのは、スライドを用意し、音声を録音し、それを編集するという手間のかかる作業なので、毎日夜中の2時や3時までかかりました。年間で350本ほど動画を作りましたが、動画作りに追われて、自分が英語教師なのかどうかわからなくなってしまったような1年間でした。

司会（編集K） コロナ禍になって困ったことや英語の授業で変わったことをそれぞれお話いただいたわけですが、今はどうなのでしょう。授業形態としては通常の対面の形式に戻っていると思いますが、全員対面の授業に戻っています。

元大K みなさんに質問したいのですが、現在は普通の授業に戻っているということですけど、これからまたコロナが流行ってくることもあると思いますが、そのときはどうするのか。そんな心配はしていないのか、授業への影響はないのかどうかうかがえますか。

現中H 私の勤務する中学校では、クラスで2人がコロナウイルスに感染すると学級閉鎖することになっています。しばらく前は3クラスが学級閉鎖になっていましたが、今は学級閉鎖はありません。ただ濃厚接触者はかなりいて、生徒は発熱したら欠席ではなく出席停止になっています。学校にいる生徒の数が少ないですね。

現高F 私が勤務する中学・高校では、コロナ禍の中で教師も生徒も対応の仕方を学んできたので、これからコロナの第〇波というような事態になったときは、いつでもオンラインの授業に切り替えるなどの用意はしています。ただ今は生徒の中に陽性者や濃厚接触者がかなりいると思いますが、対面の授業を続けています。

現高S 私が勤務する中学・高校では、コロナで一斉休校にするとかオンラインの授業にするとといったことは今のところは考えていないと思います。インフルエンザなどと同じような扱いということですが。様々な事情で登校ができない生徒には、Zoom配信も検討することはあると思いますが。コロナに対する考え方が変わってきたという感じです。今の社会全体がそうなっているとと思います。

大学K 大学の場合は、全学的にコロナ感染状況のレベルによって対応を決めています。例えばレベル2ならば原則的に対面の授業はやめてオンラインの授業を基本にするといった対応です。ただ今のところ対面の授業で、学生がコロナに感染したときは出講停止という扱いです。本学の場合は、コロナになったかどうかは自己申告制なので、本当かどうか疑う余地はありますが。学校に来られない学生にどう対応するかが悩ましいところで、教員が個別に授業の資料を送ることになっているのですが、通常の授業のための資料を作り、さらに欠席者用の資料を別に作るとなると負担が大きく、きめ細やかな対応について苦慮しているというのが現状です。

2 新学習指導要領と「指導なき評価」

司会（編集K） ここまでで各学校段階のコロナ禍における授業の様子や現在の授業の様子をご報告いただきました。関連したご質問やご意見があればうかがいたいのですが、いかがでしょう。

元中D コロナ禍とは別のことですが、ちょうどこの時期に中学校では新しい学習指導要領が施行されて、教科書が難しくなって、現場で教科書をこなしかれるだろうかと心配しているという話を聞きます。コロナ禍とあいまって中学校の生徒も先生も大変ではないかと思っているのですが、その点についてはどうでしょう。教科書はどの程度難しくなっているのですか。

現中H 小学校高学年で英語が教科化したのに伴って、言語材料の配当が前倒しになり、従来は高等学校の学習事項だった仮定法などが中学校に降りてきました。学習する語彙数も増えています。学習語彙は小学校が実質200語程度（注：小学校は教科ではなく英語活動なので語数の指定がない。）だったのが600語～700語になり、中学校ではこれまで1,200語だったのが1,600語～1,800語になりました。高校は1,800語だったのが、現在は1,800語～2,500語になりました。合計で3,000語だったのが、4,000語～5,000語になりました。教科書の1つのパートに出てくる新出単語の数が多過ぎて、こなしかれないといった感じです。いま中学2年の担当ですが、リーディングの教材は昔の3年生の内容ですね。だからどうしても消化不良になってしまう。これには授業のやり方も関係していると思います。言語活動中心の授業ということで、最近あまり教科書を丁寧に扱わない傾向があります。音読練習をしないので、教科書が読めない生徒が非常に多い。授業の中で音読練習をするのはせいぜい2,3回でしょう。それなのに音読のテストはするんです。テストをするから家で練習してくるよというのですが、できる子は一生懸命練習するけれど、できない子はしない。だからできる子とできない子の格差がますます開いてしまいます。

現高S コロナ禍でリモート授業になってから子どもたちが自主的に学ぶことが大前提になっているような気がします。どのように学習していくかという指導がなく、子どもの自主性に丸投げといった感じがします。学校に来て学ぶことの意味とか教師の意味というものをしっかり考えないといけないのではないのでしょうか。そうでないとコンピュータが教師になるといった近未来小説のようになりそうで、今が正念場ではないかという危機感を持ちます。

大学K 中学校の現場の様子を見ていると、2021年に新指導要領が施行されて「主体的に学びに向かう姿勢」が評価項目になっているけれど、主体的に学びに向かう姿勢をつくるための指導というものが無い。もともとそういう

姿勢を持っているかどうかを評価するだけになっているのではないか。「指導なき評価」ということですね。コロナ禍によってそれが如実になったということではないでしょうか。主体的な学習態度という、決められた提出物をきちんと提出したかどうかといった問題になってしまうこともあります。例えばこんな話があります。ある中学生がテストで満点をとった。そのとき「振り返りコーナー」というのがあって、「テストを振り返って反省点を書け」とある。満点なので反省点はないと思ったその生徒は何も書かなかった。そうすると主体的に学習する態度が劣っていると評価されてしまった。そんな話を聞くと、どうも本末転倒ではないかと思いますね。コロナ禍にかかわらず、評価はどうあるべきか、評価の前に指導があるべきではないかということが問題で、それがコロナ禍によって露わになってきたと思います。

元中D 大学K先生が例に挙げたような話は特別な例ではないと思いますね。「がんばったけれど評価は全部Cだった」とか、「どうがんばっていいのかわからない」という生徒の声をよく聞きます。「主体性」と言うときれいな言葉ですが、要するに自己責任論ではないか。「できる・できないは自分の責任だ」という考え方がまかり通っているような気がします。大人の世界では仕方ないかもしれないけれど、子どもや若者はそれでは気の毒ではないかと思います。

現高S コロンビア大学出身で、1998年から2008年までエール大学で英語を教えていたWilliam Deresiewicz氏の著書 *Excellent Sheep* に「アメリカの子どもたちは、学ぶということは、まず『宿題をすること』、『答えを見つけること』、そして『テストで満点を取る』だと教えられる。自分で考えることを教えられることはない。エール大学の学生は自分の頭で考える。しかし、それは教師がそれを望むからであって、教師の望みに応えるという受け身の姿勢であることは変わらない」という下りがあります。今の教育は「主体的に」と言っているけれど、現実には、主体的な学びを阻止するように動いているように思えてなりません。リモート授業になって次々に教師が課題をだす。主体的な学びとは言えないのではないのでしょうか。生徒も自分で課題を精査する、これは時間の無駄だと思えば、そんな課題はやらない、というくらいの気概を持ってほしいと思います。

司会（編集K） それはまた大胆ですね。

現高S 課題を提出しないことで教師からマイナスの評価をされるかもしれないけれど、教師が望むことに応じているばかりでは、いつまでも受け身の姿勢のsheepのままにいてしまう。そこから変えていく必要があると伝えていきたいと思っています。

現高F 文科省も、主体的で、対話的で、深い学びということを言っていますが、具体的にどのようなことなのか本当に理解して授業している教師は少ないのではないのでしょうか。

大学K 定義があいまいなまま、主体性が評価の対象になっているので、子どもに不利益をもたらしているのが大きな問題だと思います。

現高S 評価について最近疑問に思うのは、なぜみんな「振り返り」「振り返り」と言うのかということなんです。

現中H 新指導要領に準拠した新しい教科書には各単元の最後に「振り返りコーナー」がありますね。単元の初めに「こんなことができるようになるう」というCAN-DOの考え方を踏まえた呼びかけがあり、単元末に「どの程度できるようになったか」を振り返るコーナーがあるというスタイルになっています。

現高S でも、人はそれほど自分のことを振り返りながら日々生きているわけではありませんよね。

現中H 確かに、おっしゃる通りですね。

現高S いたるところで振り返ることを求められると、自分が「できない」というマイナス面ばかり意識してしまい、自尊心が持てなくなるのではないのでしょうか。

大学K できない子は「できない」という悪いイメージしか持てないようになってしまいますね。振り返りがうまく行くという大前提で物事を考えているけれど、振り返ることで気づきがあってそれを次の学習に生かせるというよいサイクルになっている子どもがどれほどいるのでしょうか。振り返って「気づいたことを書け」と言われても、なかなか書けないと思います。もっとゆったりと、漠然と「おもしろかった」程度でよいことにしないと、常に「書け」「書け」と言われては、追い詰められたような気持ちになってしまうのではないのでしょうか。

元中D もともと観点別評価は、点数が取れない子どもにも点数とは違った観点を設けて、よいところを見つけて評価してやろうという発想で始まったものなのです。それなのに、成績が1であるうえに全ての観点がCといった評価をすることがある。1であることだけでつらいのに、全ての観点がCだと言われると生きていくのが嫌になってしまいますよ。

3 「思考・判断・表現」の評価をめぐって

現高F 現中H先生に質問があるのですが、中学校では「思考・判断・表現」の評価はどのようになさっていますか。

現中H 私はリテリングとリライトングをしていて、題材の終わりに教科書の内容を要約して自分の感想を述べることにしています。「思考・判断・表現」の評価では、要約と感想がそろっていればB。さらに、その質・量が優れていればA、どちらかが欠けていればCという評価をしています。ただ、同じ学年を担当している別の教師はリテリングやリライトングはしておらず、定期テストに「思考・判断・表現」を評価する問題を設けてそれで評価しています。私の場合、学年で足並みをそろえる必要があるので、その定期テストの評価にリテリングとリライトングの評価を加えるようにしています。

司会（元高S） 高校ではどうしているのですか、現高F先生。

現高F 私の学校は、私立ということもあって新指導要領の評価は使っていません。だから「思考・判断・表現」の評価はしていないんです。

現中H 新指導要領では全ての教科が学びの三本柱で統一されています。小中高ともです。ただ現場はかなり混乱しています。「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」は一体のものだと文科省の指導資料には書いてありますが、現場の教師はそうした資料も読んでいない人が多く、自分の考えで評価をつけている。提出物を出しているとか授業態度とかで「主体的に学習に取り組む態度」を評価するようなことも多い。でも、「思考・判断・表現」の評価の対象になる言語活動に主体的に取り組んだかというのが「主体的に学習に取り組む態度」の評価になるわけで、その点を誤解している先生が多いですね。

現高S 高校でも観点別評価をどうするかで議論していますが、先生方は困っていると思います。でも、外枠ばかり決めても、それが子どもの学習意欲につながっているのでしょうか。

大学K 生徒の学習意欲は下がっているかもしれませんね。今の中学校ではテストで100点を取っても評価は3というようなことが起こります。「提出物を出さない」などの理由で学習態度が悪いと評価されると、テストの点数がよくてもこの内申書では行きたい公立高校には行けないということになります。三本柱ということで3つの項目の平均を出そうとしているから、どれか突出してできても平均化されてしまいます。子どもの個性というものが評価さ

れない仕組みになっている。本来はそういう趣旨の評価でないはずでしょう。例えば「知識・技能」がよくななくても「主体的に学習に取り組む態度」がAなら評価はAでいいという考え方だったと思う。ハワード・ガードナーの「多重知能」で、ある部分の知能が高ければそれは「知能が高い」と判断できるという考えが示されていますが、そうではなくて全ての面で平均して高くなければ「高い」と評価されない。満遍なくできる子しか「できる」と評価されないわけです。それはほんの数パーセントの子どもでしょう。だから現高F先生の学校で新指導要領の評価を取り入れていないのは、個性を生かす教育を目指すとするならば当然のこのように思いますね。指導要領を丁寧に守って評価することでどれくらいの人が幸せになるのでしょうか。もちろん「知識・技能」だけの評価するのがよいわけではないですが、複数の基準を設けたことで誰も評価されない仕組みになってしまったのではないのでしょうか。文科省には、指導要領が変わるたびに「あれもできるようになれ」「これもできるようになれ」とどんどん「できるようになるべきこと」が増えていきますけれど、それでどれくらいの人が幸せになるのですかと問いたいですね。

現高F 「知識・技能」を評価するときは従来のテストで済んでいたけれど、スピーチやプレゼンテーションなどのパフォーマンステストをするようになって、「知識・技能」以外の観点を作らなくてはいけないということで「思考・判断・表現」の観点ができたのではないかと考えているのですが、そうではないのでしょうか。

大学K そうだと思います。東京都でスピーキングテストが導入されているのもそうですが、要はプロダクティブな活動をさせたいんですよね。だから「思考・判断・表現」に「表現」という観点が入っているわけですが、ただ「知識・技能」を求めたうえでパフォーマンステストもできるようになれというのは、先ほど言った「できるようになるべきこと」が雪だるま式に増えているようにも感じます。そもそもパフォーマンステストができるようになるための体系的な指導を中学校ではしているのでしょうか。

現高F パフォーマンステストの評価は難しいと思います。今の学校現場での評価を見ていると、評価方法だけはしっかりしているけれど、方法と内容が一致していないように見えるんです。評価は子どもに大きな影響を与えるので、わけのわからない評価をされると子どものモチベーションが下がります。だから自分の学校では取り入れていない。それに、先生方の話を聞くと、新しい授業の在り方を考えるよりもどうも今までの授業でやっていることを変えずに、それをお役所の言葉に合わせていくといった感じなので、それはおかしいんじゃないかと思っています。

現中H 先日「定期テストで86点取っているのになぜ「3」なのか」という保護者からのクレームがありました。普通に考えれば定期テストで90点以上取っていれば「5」だし、80以上点取っていれば「4」ということになる。それなのになぜ80点以上取っているのに評価が「3」といったことが起こるかという、いろいろと自分が用意した評価資料のデータを教師が生そのまま取り入れているからなんです。保護者から評価がよくない理由を問われると、例えば「この提出物が出ていないから」といったことを教師は答える。しかし、それは「木を見て森を見ていない」評価なのではないかと思います。提出物云々は木の部分で、テストで80点以上取っているならそれをしっかり見なければ「森を見ていない」評価ということになるでしょう。もうひとつはテスト自体の問題がある。「知識・技能」を測るだけでなく、英文を読んで要点を捉えるとか、タイトルをつけるとしたらどれがいいとか、例えば先生が遠足の説明をしたとすると、先生が言わないことで大切なことは何かなどを問うのが「思考・判断・表現」を問う問題だと思うのですが、そうした工夫があまり見られません。また、先ほど元中D先生もおっしゃいましたが、「主体的に学習に取り組む態度」についてはプラス志向で見たほうがよいと思います。「主体的に学習に取り組む態度」で見るべきものがあつたらCの生徒はBにする、Bの生徒はAにするという肯定的な評価を心がけるべきだと思います。どんなにがんばっても評価がCだとすると、本当にやる気を失ってしまう。子どもを力づける評価をしなければならぬと思います。自分の決めた評価資料を全て取り入れようとする、全体を見たときに何かおかしいことになってしまう。「木を見て森を見ない」評価になってしまうというのがいちばんの問題だと思います。

現高S 昔は都立高校の入試でも内申点は抜きにテストの成績が良い生徒は入れていたと思うのですが、今はそういうのはないのですか。

大学K ないですね。今はテストだけの評価はしていません。現高F先生と現中H先生の話からわかるのは、評価規準を反映するような正しい評価の方法がわかっていないということだと思います。それでおかしな方法でもいいから評価してしまえということになっている。また、コロナのことを考えると「思考・判断・表現」も「主体的に学習に取り組む態度」も対面形式の授業を前提にしていると思います。どちらも目の前に子どもがいて観察できなければ測るのがとても難しくなります。コロナの時代のオンライン授業の形式だと新指導要領が求めるものは測りようがないといったことにならないかということがずっと疑問なんです。

4 木を見て森を見ない評価

司会（元高S） 現中H先生から「木を見て森を見ない」評価が多いというご指摘がありました。それはこの場にいるみなさん共通の考えだと思います。

「木を見て森を見ない」評価ということについて、あるいはそうしたことに陥らない評価や授業の在り方についてどう考えるか、みなさんのご意見をうかがいたいのですがいかがでしょうか。

現高S 私はコロナ禍の中でZoomの授業と対面の授業を経験して思うのは、生徒が授業の中で触れ合うこと、生徒同士で対話をするということをするのが楽しくて、だから「思考・判断・表現」の力を発揮するような活動を生徒がグループの中でやるのがよいのではないかと思います。人と人が触れ合えるのは当たり前だと思っていたけれど、コロナ禍を経験してそうでもなかったということを経験してみんな認識したと思います。ですから、子どもたちがインタラクションとか自分の気持ちを伝え合う活動を大切にしていきたい。その中で生徒が頭をしっかりと使うような活動を工夫していくというのが大切なことではないかと思います。

現高F 私はスキャホールディングとか、足場架けを教師が工夫することが大切だと思っています。生徒が「できそうだな」と思うような仕掛けを作ることですね。ライティングをやっているのでも、どうしたら書けるようになるかを教えて、生徒に書く体力をつけるようにがんばっているんですが、子どもの書いたものを読むと「この子はがんばっているな」というのがわかるんです。だから生徒ががんばっているのを見つけてあげるのが教師の仕事ではないかと思っています。やる気を出せるような、書いてみたいと思えるような足場架けをして、生徒がアウトプットをしてそのことで自信をつけさせていくということの繰り返しではないかと思っています。

大学K 現高F先生の話の話を聞いていると、先生の学校は頼もしいな、ぶれてないなと感じます。何を教えるかということがはっきりしているからだだと思いますね。

現高F いや、そんなことはないですよ。ただやることは各自に任されていて、私の場合はいつも試行錯誤なんですけど、私学なので指導要領に縛られていないというのがありがたいと思っています。公立の学校は大変だと思います。今のような評価をしていると、子どもたちのモチベーションが下がっていくのではないかと危惧しています。

大学K 私が気になるのは、みなさん評価に興味がありすぎるということなんです。現高F先生の学校でよいと思うのは評価が先に来ていないということです。どういう子どもを育てるか、どういう力をつけるか、そのためにどういう活動をさせるかというのがまずあって、評価はそれについてくるものだ

と考えています。それが自然な考え方だと思います。今は、どういう力をつけるか、どういう活動をさせるかがあいまいなまま評価規準だけが先に決まっている。文科省が先に評価規準を出しているのも現場が混乱するのではないかと思います。順序が違うと認識すべきではないでしょうか。

現高S 現高F先生のところは、個々の先生に授業をゆだねているのがよいのではないかと思います。今の学校は教師がみんな同じことをしようとしているのがまずいのではないのでしょうか。子どもにこれを伝えたいという思いが先生にあれば、個性的な授業をしてよいと思うのですが、学校現場では、みんなが一斉に同じことをやらなければならないと考えています。それはよくないのではないのでしょうか。先生の個性が発揮できないことが教員のなり手が少ないことの一因かもしれません。教員はみんなそれぞれでよいと思います。

現高F 「知識・技能」は今まで通りテストで評価すればよいと思うんですが、「思判表」とか「主体的に学習に取り組む態度」は評価する教員の主観なんですね。優しい教師もいれば厳しい教師もいるので、教師によって評価が違ってくると思う。だからそこは疑ってみる必要があると思います。本当は生徒ががんばっているのに、教師がそれを見取れないということもあると思う。主観的な評価はこわいと思います。テストは客観的なデータとして使えますが、主観的な評価を持ち込むといたずらに子どもを不安な気持ちにさせるのではないかと思います。どうでしょう。

大学K まったく同感です。

司会（元高S） かなり時間もたちましたので、本日の話し合いのまとめにかかりたいと思います。これまでの話し合いで、私たち小委員会としての共通の考えがはっきりしてきたのではないかと思います。ではこれからどうしたらよいかということについて話し合うことを今後の課題としていきたいと思います。いかがでしょう。

元大K 今回の話し合いで大変重要な問題が提起されたなという印象です。私は学習指導要領の作成に携わった経験がありますが、ここで話題になった「思考・判断・表現」の評価も、前よりもよいものにしようとして出てきたのだと思います。教科調査官や全国から選ばれた学者や教師が議論を重ねて作った指導要領なので、「思考・判断・表現」の評価の導入もそれなりの理由があってやっているはずですが、しかし実際の授業はうまくいっていない。そのギャップが大きい。指導要領を作成する過程でそうしたギャップは予想されていたはずで、それなりの手当てをしたと思うのですが、現実にはおかしなことになっているのはどこかが狂っているのだらうと思います。この座

談会でその問題を指摘するのはよいのですが、なぜギャップが生まれたのかという理由をはっきりさせるための調査や準備がわれわれに必要だと思います。単に問題を指摘するだけでなく、もっと深く、どうしてこのような狂いが生じたのか調査する必要があるだろうし、それではどうしたらよいかという提言も模索していく必要があるでしょう。例えば各県の指導主事が現場を回って指導要領にもとづいた指導を行っているはずだが、それに対する現場の反発とか無視とかいったことがあるかどうかといったことも確かめる必要があると思います。最近評価について感じるのは、評価の方法についての研究が進んでいるということです。統計学の手法を取り入れるなどして評価の分野でかなりレベルの高い人たちが出てきている。それに比べて、指導法・教授法の研究は影が薄い。コロナ禍によってかき消されているといった印象があります。コロナ禍のために授業のよしあしの前に授業がやればよいといった事態になっているからでしょうか。最近の傾向として、英語教育の研究が評価に力を入れ過ぎて統計的なことに向かってしまい、英語の授業自体を検証することが少なくなってしまうのかもしれないとも思います。私が指導要領に関わっていたときは、英文和訳中心からコミュニケーション重視への転換という大きな視座で考えて、細かいところにはタッチしていなかったのですが、議論が進んで指導要領が細かいところにタッチするようになって、それがかえって枝葉末節にこだわって間違いを生んだということであれば、それはまずいことだなあと感じます。「木を見て森を見ない」評価というのが全体の傾向だとしたら困ったことです。

司会（元高S） 指導要領は生徒の英語力を伸ばすためのものなのに、逆効果になっているような気がします。枝葉末節というか評価のことだけが独り歩きしている。では生徒の英語能力を伸ばすにはどうしたらよいかということをお私達が考えなければいけないと思います。われわれがやるべきことをやっていたら指導要領が求めるものになるはずなのにそうならないのがいちばんの問題だと思います。これからも引き続き話し合いを深めていきたいと思っています。本日はありがとうございました。